ぐらの事ときこゆ、今爐火をこたつと云はいにしへにたがへり、嫁迎記に、こたつのやうなるものとあるも、今の言にていはゞ、こたつやぐらのやうなる物といふ義ならん、いにしへの通例のこたつは、今のよりは、ひくゝありしなるべし、寛永のころ、別に高ごたつといへる物ぞ、今のこたつやぐらなるべき、さるからやぐらと云名をおひしこと、前にいへるがごとくならん、今も信州のこたつは、うへを板にてはりつめ、すこしあひだをすかして火氣をもらす、高サは通例よりひくきよし、それぞ古制のなごりなるべき、格子をつくるは後ならん、

〔後水尾院當時年中行事下〕一風呂こたつなどは宮中にはなし、させるゆゑもなけれど、只ありつけざる事は、何事もはじめがたく此類多し、

〔備前老人物語〕一渡邊水庵翁は、火燵きらひなれども、とし寄の火燵にあたらぬはすげなきもの也とて、いかにも火をよはくして、常によりそひて居られけり、寒き比客來れば、まづ火燵へより給へと請じられけれども、老人といひ、武功有る人といひ、たやすく近づく人すくなかりけり、かくては物語も玄まずとて、置火燵を出しければ、客も心やすく火にあたり、ゆるやかに四方山の物語せられしと也、客多き時は、なを置火燵を出されしと也、今時かく客あしらひする人まれなるべし、

〔覆醬續集四〕足爐釋名辟邪、俗曰非於計、

和氣盈裀褥、夢回心體胖、圍爐埋焰炭、永夜忘玄寒、湯媼明吳寛湯媼傳有爾休妬、丙童吾所安、辟邪勝燕玉、煖老有餘歡、

〔萬寶鄙事記三〕火燵に火を入る事、灰は藁をたきたる灰を用ひ、爐のうちをふかく掘り、灰を四方にあげて、其くぼき所に熾火を入、おきのめぐりを灰にて埋み、中を埋まず、性よき炭火を朝うづめば、其夜まで滅ず、夜うづめば、翌朝迄もきえず、但し風にあふ時は、はやくきえやすし、